

「たし算とひき算のひっ算(1)」

1 提案の主張点

算数として価値あるものが獲得できると期待できる算数的活動(体験)を重視し、様々な学習材の中から児童が選択できる機会があることが重要である。

集団の中で個が生きる学び合い(一人一人の思考過程を大切にしたい学び合い)の工夫が大切である。TT指導においては、個別指導をしたり、子どもの反応を見取り授業に生かしたり、子どもに代わって言葉を代弁したり、よいところをノートに書き込み評価を行ったりするT2の存在は大きい。

個の習熟度や学習課題にあった学習活動が展開できるように、少人数指導などにおいて、どの児童にも学ぶ価値のあるコース別学習を工夫する必要がある。

評価については、児童が課題を解決する過程においてどのような関心・意欲を持って取り組んでいるか、どのような数学的な考え方を使っているか、簡潔・的確に処理しようとしているかなどといった視点で行う必要がある。また、それは、児童が自己の学習を改善したり深めたり広げたりと、学習の成果を高めつつ数学的な概念を形成できるものである。教師は習得状況を見て、学習活動の軌道修正・補充や発展の必要性を見極めながら、指導計画の改善を図ることができるものでなくてはならない。

2 提案に対する意見

Q. 効果的な評価のひとつである教師による言葉かけは、どのようなもので、どこに書くのか。

A. 「すごいね。」ではなく、「 がすごいね。」と言葉をかける。また、放課後に思い出してメモしておく。ノートへの書き込み評価は、家庭で話題にもなり、家庭とのかけ橋となる。

Q. 学習をふりかえる時間を、どこにしているのか。

A. 終末の5分間は確保している。教師のコメントを必ず入れると、児童は苦にせずノートを出す。その積み重ねによって、高学年になると学習の途中に書くことを決めておくようになる子も出てくる。ふりかえりを書きたくなる子に育つ。

・ はやい・・・ $1 + 3 + 2 = 6$

たしかな・・・ $1 + 3 = 4$

$4 + 2 = 6$ とあるが、

はやいなら、 $3 + 2 + 1 = 6$ の方がいいのでは。

・ 人とのかかわりが重要である。人とのかかわりを通して、基礎・基本が身に付く。つまり、自分で作ったものをもって班でかかわることによって、より楽しく、意欲的に学び合うことができるようになる。また、その時、教師がいかに児童に関わっていくかが重要となる。

3 御指導

(1) 「造語は子どもの算数文化」について・・・

文化とは、個人が作るものではなく、その場のみんなで作上げたものである。そのために、話し合いが必要となる。

算数とは、技能や知識を伝授しそれを点数化して評価するという教科ではない。造語を作り出す過程がすばらしい。なぜなら、児童が言葉を発することができる状況にあるということであり、人間関係や興味をひく課題作りが特に重要になってくるからである。造語と用語の区別は、2年生なら大丈夫であろう。

(2) 評価・評定について・・・

流れの中での評価である形成的評価が課題となってくる。目標を達成させるためにも、作業を続けさせた時の発問は「どうしてこうなったん。」ではなく、「じゃあ、次は何を書こうか。」がよい。なぜなら、前者は理由をいうためにふりかえることによって思考が途切れる。それに対して、後者は思考が途切れにくい。

(1) 一人一人が楽しく分かる算数学習について・・・

算数的活動とは操作であり、そこから言葉がうまれる。少人数とは、個に応じるためのものであり、TTも教師が個性を発揮することにより、いろいろな指導方法が生まれてくる。

(2) 評価について・・・

形成的評価をするためには、今日の観点を決めて行う必要がある。

自己評価を学習の途中で書こうとするということは、めあてをもって取り組んでいるということである。すなわち、やらされる授業ではなくやりたい授業と感じているからである。また、教具が自分の考えを確かめる材料となっていることも大切であろう。